

聖書箇所：ルカの福音書9章1～9節

説教題：この人はいったいだれなのか

## 1 権威と力を受けた使徒たち

### (1) 信仰

イエスは弟子の中から十二人を呼び集め、特別に悪霊を追い出し、病気を直すための力と権威を授けました。後にわかることですが、弟子たちは、いつまでも悪霊を追い出せたものではありません。しばらくすると急に悪霊を追い出すことができなくなります。イエスがそれをご覧になり、弟子たちの不信仰を嘆くほどでした。

そのことから推測するなら、イエスがここで十二人に力と権威を授けられたのは、弟子たちの信仰が力と権威を受けるのにふさわしいレベルになっていたからということになります。どの程度の信仰だったのでしょうか。

少しさかのぼって弟子たちの信仰のことがわかる場面が、8章22節以降に出て来ます。あの湖の嵐の場面です。弟子たちが湖を舟で渡ろうとしていたとき、突風が吹き、舟は転覆しそうになります。イエスは舟の後ろのほうでぐっすり眠ってしまわれました。それを見た弟子たちは、イエスに近寄り、たたき起こします。「先生。先生。私たちはおぼれて死にそうです」と叫ぶ。イエスは起き上がり、風と荒波をしっかりとつけると、湖はすぐにしずまりました。そしてイエスは言われます。「あなたがたの信仰はどこになるのです。」

このときは、弟子たちの中にすばらしい信仰があるようには見えません。その後、弟子たちは、イエスが悪霊を追い出したり、病気を

を治したり、死んでいた子どもをよみがえらせたり、そんな場面に立ち会っていきます。おそらく、その事を通して弟子たちの信仰が少しずつ変えられていったとは思うのですが、急に信仰深くなったはずはありません。以前としておぼつかない信仰のままです。それなのに、イエスのご自分の持つておられた力と権威を弟子たちにゆだねられたことに驚きます。小さな信仰であっても、イエスはそれを大きな信仰としてご覧になってくださることを感じます。

### (2) 危険

さてイエスが使徒たちに力と権威を授けられたことを読み、皆さんはどう思われるでしょうか。うらやましいと思いますか。自分にもこのような力と権威があったら、いろいろな人をいやして、困っている人を助けることができる。一見すべて良いことづくめに見えますが、そうではない。どんな場合でもそうですが、力と権威を手にする者は、同時に大きな誘惑に近づくことにもなります。

イエスは旅をするにあたり、いろいろな注意を与えました。「旅のために何も持っていないようにしなさい。」何も持たなくても、信仰によってすべての必要が与えられていく。その事を学ばせるためであったのでしょうか。そして実際に旅に出見ると、すべてのものは与えられていきます。非常に順調な旅でした。

順調さはときには危険をはらみます。彼ら

は大きな誘惑にさらされていきます。自分が十二使徒の一人であつたらと想像してみてください。大ぜいの病んでいる人たちが自分のところに連れて来られ、たちまちいやされる。たちまちにして悪霊が追い出される。そのたびに人々は驚きの声を上げ、感謝のことばを自分に語る。悪い気はしません。最初は謙遜に思っていたでしょう。「これは自分の力ではない。」でも人間の心は簡単に変わります。毎日同じようなことを繰り返しているうちにいつの間にか自分が最初から持っている力だと勘違いし始める。どんなに注意してもそうになってしまう。それが私たちの弱さです。

弟子たちはその誘惑に負けてしまい、そのことが後で問題になります。

## 2 ヘロデ

### (1) うわさを聞く

十二人の使徒たちが旅先でどのようなことをしたのは、具体的なことは書かれていません。その代わり、使徒たちがやったことの噂がヘロデの耳にも聞こえてきます。ヘロデとはイスラエルの王様です。政治のトップに立つ者の耳にも聞こえてくるほど大きな騒ぎになっていたのです。

ヘロデが特に関心を持ったのは、この出来事を引き起こしているのは誰なのかでありました。実際に大きな出来事を引き起こしているのは十二人の使徒たちなのですが、おもしろいことに、人々は使徒たちのことを脇役としか見ていない。人々は、むしろ使徒たちの背後にだれがいるのか。つまり人々がナザレのイエスと呼んでいるあの人物はいったい誰なのか。そこに目を留めていた。ある人たちは、イエスのことを旧約聖書の中に登場

するエリヤだと考えました。またある人たちは、ヨハネが死人の中からよみがえったのではないかとも噂しました。ヘロデはこの「ヨハネ」という名前に敏感に反応します。

### (2) 洗礼者ヨハネ

ヨハネとはだれなのか。少しおさらいをします。ヨハネはヨルダン川のほとりで、罪が赦されるための悔い改めに基づくバプテスマ、つまり洗礼を受けなさいと人々に勧めた預言者です。ヨハネはそれだけにと停まらず、ときの権力者ヘロデの悪事を徹底的に指摘します。そんなヨハネはヘロデにとってうるさいハエのようなものです。今で言えば別件逮捕ということでしょう。なんやかんや理由をつけ、ヨハネを逮捕し牢に閉じ込めてしまいます。でも人々の目がありますから殺す事はできない。ところがヘロデの妻の工作によって、ヘロデはみずから手でヨハネの首を切り、殺してしまいます。

### (3) 罪がうずく

ヘロデはイスラエル人です。イスラエル人にとって律法は大切なものであり、守らなければならないことを承知していながら、どうどうと人々の前で律法を破り、恥じるようなことはしません。ヨハネがしつこいほどにヘロデの悪事を声を大にして指摘しても、悔い改めるようとはしない。ヨハネの首を切るときも、ヘロデが一番気にしたのは自分のメンツ、プライドのことばかりです。律法を破ることがどれほどの罪なのか、自分はどれほど悪いことをしてきたのか、そんなことなどまったく気にもしません。

そんなヘロデが、洗礼者ヨハネが死人の中からよみがえったのではないかといううわ

さを聞き、ひどく当惑してしまいます。もしヘロデが心を持たない機械のような人間であったなら、どんなうわさが聞こえようか感じることはなかったでしょう。

しかしヘロデも人間です。人間であれば、必ず心を持ち、心の中には隠された罪が潜んでいます。ヘロデもそうなのです。ヨハネの首を切ったときは、心の痛みなど感じるなどなかった。うるさいヨハネを始末できたことを喜んだくらいでした。ヨハネを殺した後、ヘロデはそんなことをすっかり忘れていました。

しかし忘れてしまった、思い出さないからと言って、罪がなくなったわけではありません。罪はヘロデの奥深いところにそのままあるのです。そして罪はあるとき、何かの機会を捉えて、私たちの心のなかでうずき出します。ヘロデがひどく当惑したのはそのためです。ヘロデの中で罪がうずき出したのです。

### 3 罪に苦しむ

このことに関連して、こんな話を聞いたことがあります。自分が過去に何をしてきたのか、元気なときはいつ言い言わなかったけれど、年齢を重ね、病気になり、残された時間がそれほど多くはないと気がついたとき、ある人は自分の罪をどうしても誰かに言わなければと思わされるのだそうです。

私たちは自分が考えている以上に、罪に苦しんでいる。でもその罪の意識をどうすることもできない。自分の後ろめたい過去のことなど言わなければだれも知らない。それでいいではないか。そう思っていたけれど、現実にはそうではない。誰かに告白しなければ、罪を背負いきれない。苦しくてたまらない。人間とはそのようなものなのだと思うのです。

私は立場上、そのような告白を聞く立場にあります。何気ない話題をしながら、その次の瞬間、その方が抱えてきた罪のことをことばで語り始めることがあります。その時私は思うのです。その方は私に語っているのではなく、見えないけれども確かに生きておられる神に向かって、罪の告白をされている。神が今ここにおられる、そしてこの方が告白される罪の告白に耳を傾けてくださっている。ほんとうに厳粛な思いにさせられ瞬間です。

### 4 この人はいついだけなのか

罪はあるとき私たちの心の中でうずき始めます。ヘロデも例外ではありません。あのヘロデがなぜ罪にうずくのか。さかのぼれば、イエスが十二人の使徒に対し、力と権威とを授け、神の国を宣べ伝えるようにと命じたことがきっかけでした。

病気が直った。悪霊が追い出された。私たちの目にはその事ばかりに目がいきます。でも、実は神は見えないところでもっと大きな働きをされていたのです。ヘロデにさえ、罪のうずきを感じさせるほどの神の働き。同じように私たちにも神は働かれます。

なぜ神は罪にこだわるのでしょうか。私たちを苦しめている最大の原因だからです。私たちを責めるためにそうするのではない。私たちを罪の苦しみから救い出したいがために、あえて罪に触れようとされます。

ヘロデは罪のうずきを感じ、こう言います。「そうしたことがうわさされているこの人は、いついだけなのだろう。」

ヘロデがイエスに会ってみたいと思ったとあります。考えてみれば不思議なことです。普通なら会いたくありません。イエスがヘロデの心に働きかけているのです。ヘロデとい

う罪ある者にもイエスは近づいてくださる。  
そしてイエスとは何者であるのかを示そう  
とされる。私たちにも同じことをされる。

私たちはいつどのようにしてイエスにお  
会いするのでしょうか。私は罪があるから神に  
会うことなどできない、と考えるでしょうか。  
いいえ。私は汚れた者ですと悲しむ者こそ、  
神のそばに一番近いところにいます。罪のう  
ずきを感じるなら、それは一瞬つらいこと  
ですが、でもじつは神の所に向かう幸いな瞬間  
ではないでしょうか。

イエスとはだれなのか。わからないことだ  
らけです。しかし確実に言えることがある。  
この方は、私たちの罪の告白をそのまま受け  
とめてくださり、絶対に責める事はない。い  
やむしろ、こう言ってくださる。「あなたは  
正直に告白してくれた。わたしはあなたのため  
にいのちを捨てます。そして、あなたを神  
の国に迎えますから安心なさい。」

私たちの重荷を背負ってくださる主イエ  
スに目を留めて歩んでまいりましょう。